

## パウル・ティリッヒ研究(V)

### —「深さ(depth)」の概念について—

森 田 美 千 代

#### I 問題の所在

#### II ティリッヒにおける「深さ (depth)」の概念

(i) 手がかりになる一例

(ii) 「深さ (depth)」の概念

#### III 「深さ (depth)」の概念が教育に示唆する諸点

#### I 問題の所在

パウル・ティリッヒが発表したほぼ著作順に、パウル・ティリッヒ研究 (I)においては「境界線 (boundary)」について、(II)においては「不安と生きる勇氣」について、(III)においては「愛・力・正義」について、(IV)においては「究極的なかわり (ultimate concern)」について、今まで考察してきた。今回は、説教集を手がかりとして、「深さ (depth)」の概念について、考察を深めたい。

最初に、教育を私はどのようにとらえているか、その大きな枠組みを、述べておきたい。私は、教育を、人間が人間となることに他の人間が関わることである、ととらえている<sup>(1)</sup>。そして、人間が人間となるということは、人間が人間となっていくことと、人間が人間となることとの両者を含む、と考えている。ここで取り扱おうとしていることは、人間が人間となっていくことにせよ、人間が人間となることにせよ、いずれにせよ、非本来の人間 (現実の姿における人間、疎外の中にいる人間) が本来の人間 (「本」に結びついている人間、「本」から来ている人間) に還帰するということを、「深さ (depth)」の概念を導入することによって、明らかにしようとする

ことである。(私のこれまでのパウル・ティリッヒ研究をふりかえってみると、ティリッヒのいろいろな著作にあらわれているいろいろな鍵概念を取り出し、その諸概念を導入することによって、非本来の人間が本来の人間に還帰するということはどういうことであるのかを明らかにしようとしたことに集約できるように思う。)

テキストを読む視点および本研究のねらいは、(1)まずティリッヒの文脈に即して読み考えること、(2)教育学ないしはキリスト教教育学へのティリッヒの貢献と示唆を掘り起こすこと、である。力点としては、後者にある。

テキストとして、『地の基ふるい動く (The Shaking of the Foundations)』(1948年)の中の「現実存在の深さ (The Depth of Existence)」と「真理を行なう (Doing the Truth)」を主として使用し、そして、必要に応じて『新しい存在 (The New Being)』(1955年)を使用する。

『地の基ふるい動く』の説教集は、そのほとんどが、ユニオン神学校の、聖日礼拝ないしは平日の礼拝において説教されたものである。そして、それらの説教が出版されるようになった理由には、「序」でティリッヒが明らかにしているように、二つある。その一つは、ティリッヒの神学は容易に理解できるものではなかったことから、説教でなら、ティリッヒの組織神学とその神学がもつ「実存的意味 (the existential implications of his theology)」がもっとはっきりとわかるだろうと、ティリッヒの学生達やユニオン神学校の外の友人達に考えられたことである。もう一つは、厳密な意味でのキリスト者達でない人々も聖日礼拝に出席していたことから、伝統的な聖書用語を使っているのは、彼等にとって何ら意味をもつものとはなりえない。従って、伝統的な聖書用語を使用しないで、別のわかりやすい表現に翻訳して、聖書が言わんとするところを伝える必要を、ティリッヒが感じたためであるという。例えば、ティリッヒが、罪を分離であるといいかえ、愛は結合であるといいかえ、神は深さであるといいかえるのは、以上のような理由によるのである。

ティリッヒの説教集は、彼の思想や神学の発想の根になっているものであるといえる。この説教集からティリッヒのさまざまなまとまった思想や神学が出てきているとあってよい。そういう意味で、説教集は、彼が自らの思想や神学を展開していく原型といえるものがおさめられているといえ

る。ただ、原型とはなりえてはいるが、論理的整合性においてはもう一つ不十分な所があるともいえる。

ティリッヒのもう一冊の説教集である『永遠の今 (The Eternal Now)』(1963年)には、今回全然ふれることができなかったのもので、次回にとりあげる予定である。

## II ティリッヒにおける「深さ (depth)」の概念

### (i) 手がかりになる一例

ティリッヒにおける「深さ」の概念を考えるその手がかりになる一例を、彼は次のように示してくれている<sup>(2)</sup>

中国のある皇帝が、有名な画家に、鶏の絵を描いてくれるようにたのんだという。画家は絵を描くことに同意したが、描きおえるまでにはながい時間がかかるであろうと言ったという。一年が過ぎて、皇帝は画家に約束事を思い出させたというのである。画家は、一年間鶏を研究してみて、やっと鶏の本性の表層 (surface) がわかりはじめた、と答えたという。あと一年たって、画家は、鶏の本性を洞察しはじめた (penetrate) といったという。このようにして歳月が流れていき、ついに十年間にわたって鶏の本性を理解することに集中 (concentration) した後で、画家は絵を描いたということである。その作品は、鶏という宇宙の小さい一部分であったにもかかわらず、その鶏の絵は、宇宙の神的根底 (the divine ground) を余す所なくあらわしているものであったという。

ここでティリッヒは、次のように付け加えている。皇帝の賢明な忍耐 (wise patience) および神的生命 (ここでは鶏) を描く時に画家がおこなった聖徒の如き黙想 (contemplation) と、ある有名な景勝の地に車を走らせ、「なんとすばらしいこと」と明らかに景色をではなく自分自身の美の鑑賞力を暗に言いがちな現代人とを、比較して欲しい、と。

以上の一例は、ティリッヒ自身の考える「深さ」の概念を考える時の、また私達がティリッヒの「深さ」を基にして「深さ」について考える時の、特に教育における「深さ」について考える時の、手がかりや典型となりえる例であり、そして、「深さ」に到達するためのいろいろな要因をも典型的に表わしてくれている例であるといえる。

### (ii) 「深さ (depth)」の概念

(1)ティリッヒによれば、「深さは空間 (space) の一つの次元であるが、同時に、精神的質 (spiritual quality) を表わす象徴でもある。」(Ap.52, A'p.78) という。ティリッヒは、前者の「空間」のことは全然考察の対象にはしていなくて、もっぱら後者の「精神的質」を問題にしている。そして、精神的質を表わす使用法の「深さ」には、二つの意味がある、という。それは、「浅い (shallow)」とか「表層 (surface)」と対比された意味と「高い (high)」と対比された意味である。(ティリッヒは、後者については全然触れていない。) (Ap.53, A'p.78)

(2)「深さという語は、世俗的用語 (secular language) と宗教的用語 (religious language) との両者の意味をもっている。」(Ap.59, A'p.86) 従って、(1)であげた精神的質としての「深さ」をティリッヒが問題にする時、最終的には宗教の意味での「深さ」を問題にするのであるが、そこにいたるプロセスにおいては、宗教の意味での「深さ」とともに世俗の意味での「深さ」をも包含しているように、私には思える。世俗的用語としての「深さ」と宗教的用語としての「深さ」を峻別していないように思われる。このことが、私が spiritual quality を「霊的特質」と訳さないで「精神的質」と訳した理由でもある。(後藤真訳および加藤常昭訳では霊的性質とか霊的特質と訳されている。)

(3)ティリッヒにおいては、個人生活 (individual life) における「深さ」ばかりではなく社会生活 (social life とか common life とか historical life とかいくつかの用語が使用されている。)における「深さ」をも含んでいる。それは、ティリッヒの「私達が一つの世界に生きるのはただ人々の共同体 (a community of men) を通じてである。(略)この共同の生活の深さ (the depth of the common life) を欠いて生の深さ (depth of life) は存在しない。」とのことばにもあらわれている。(Ap.57, A'p.84)

以上のように、最終的には宗教の意味での「深さ」を問題にするのであるが、そこにいたるプロセスにおいては、多面的な「深さ」をも考察の対象にしている、宗教の意味での「深さ」に対象を限定してはいない。

さて、いかなるものも表層 (surface) をもっている。そして、いかなるものについてもそれについての探究は、まずはその表層からはじまる。ここで、平面的な横の動きをしはじめるか、垂直的な縦の動きをしはじめるかの二つの動きがあり、そしてその二つの動きは非常に異なった動きであ

る。前者について、ティリッヒは、次のようにいっている。「私達の生活の大部分は表層的なところで (on the surface) 続けられているだけである。(略) 立ち止まって高く自分の上 (the height above us) を仰ぐこともないし、自分の下 (the depth below us) を深くのぞき見ることもしない。私達はいつも前につき進む (move forward) だけである。(略) 私達は、絶えずしゃべりまくって、自分の深みに向かってあるいは自分の深みから (to our depth and from our depth) 語りかけてくれる声に決して耳を傾けようとはしない。(ということは、ティリッヒにおいては、深みへと入っていくことができるということ、深みからの声を聴くことができるということは、同じことを意味しているということがいえる。) 自分に見える表層的な自分自身を受け入れており、本当の自分が何であるかに心を配ることもない。」(Ap.55~p.56, A'p.81~p.82)

このように、表層をかけずりまわっているのが、あるいは、かけずりまわるようにさせられているのが、日常的なレベルでの私達の姿である。そして現代という時代はその極みに達しているといえるように思う。そして、それは、ある意味で、人間にとっては快適な (comfortable) ことでもある。その間のことをティリッヒは次のようにもいう。「揺り動かされない (unshaken) でいる限り、表層で生活することは快適なことである。その表面を離れ、未知の根底を尋ねて下っていくのは、苦痛 (painful) である。どの人間のなかにもある、そういう行為に抵抗しようとする途方もない努力、そして、深さにいたる道を回避するために考え出された多くの口実、当然である。自分自身の深さを見入る苦痛 (pain) は、たいていの人々にとってはあまりに烈しすぎる。むしろ、以前の生活と思想の、動揺しているそして荒廃した表面に戻りたいのである。」(Ap.59, A'p.86) 人が「深さ」にいたる道を回避するために考え出した口実として、ティリッヒは二つあげている。その一つは、皮相的な口実であるが、深い事柄などについては、無教育の人間には、詭弁的 (sophisticated) で理解しがたいとって逃げることである。(Ap.60, A'p.87) もう一つは、宗教的用語における「深さ」は、しばしば悪の力 (evil forces) や悪魔の力 (daemoniac powers) や死および地獄 (death and hell) の住む場所を表現するのに使われることが多いのではないかという人々がいるということである。(Ap.60, A'p.87) (宗教界では確かに一般的に深い所を悪や悪魔の力の住む所を表わしていると考え

られがちであるが、ティリッヒはそれを逆転して神そのものあるいは神が見い出される所と発想を転換したのは、まことにティリッヒのすばらしい独創であるといえると思う。上昇志向ではなくて下降志向を、意識的にか無意識的にかしていることは、ティリッヒの思想家としてのユニークな所であるといえると思う。) ティリッヒは、以上の二つを深さに到達するのをさまたげている要因としてあげているが、もちろん現代において深さに到達するのをさまたげている要因としてこれだけでは不十分であるのはいうまでもないであろう。

ところが、にもかかわらず、垂直的な縦の動きをする人々も歴史上には確かに存在したし、現在も存在している。深さを問題にする主体が誰であろうと、つまり、学者であろうと、宗教家であろうと、平凡な一人の市民であろうと、人間は、確かに「深さ」を問題や課題にしてきた。また、対象としても、自分自身についても人間関係においても自然科学においても社会科学においても哲学においても文学においてもいかなる学問においても、「深さ」は問題や課題になってきた。つまり、主体が誰であろうと対象が何であろうと、垂直的な縦の動きはされてきたといえると思う。そして、「生きることには深さはない。生きることそれ自体浅薄なことである。存在それ自体表層のことである。」(Ap.57, A'p.83) と徹底的に断定できない者にとって — そしてそう断定できないのが大多数の人間であるが — すでに無自覚的であるにしても、「深さ」を問題や課題にしているともいえよう。

ところで、表層にあらわれたもの(物そのもの、できごと、自分自身、他の人間、聖書のことば、など)を掘り起こしたり、掘り起こされたりしていくと、はじめにあらわれていた層とはちがった層があらわになり、そしてさらに深い層にいたると、以前の層は表層になる。このようにして、深層へ深層へと進んでいくと、(宗教的ないいかたをすれば、より深層の場所からの声を聴くことでもあることになるが、)「私達の存在とすべての存在の最も深い根底 (the deepest ground of our being and of all being) へと、生命そのものの深さ (the depth of life itself) へと」(Ap.57, A'p.83) 導かれる。それを、ティリッヒは、神と呼んでいる。「この無限にして尽きることのない深さ、そしてすべての存在の根底の名が、神である。この深さが、神の名が意味するものそのものである。(略) あなたの生の深さ (the

depths of your life), あなたの存在の源泉 (the source of your being), あなたの究極的なかわり (your ultimate concern), あなたが無条件に真剣に受けとめていること (what you take seriously without reservation) が, 神である。(略) 深さについて知っている人は, 神についても知っている。」(Ap.57, A'p.83) つまり, ティリッヒにおいては, the deepest ground, the deepest level つまり「深さ」イクオール神という図式になっているのである。

深層へ深層へと進んでいく際, 眼にみえる形としては, 告白 (confession), 孤独な自己吟味 (lonely self-scrutiny), 祈り (prayer), 黙想 (contemplation) などの形をとりつつ深層へ深層へと入っていくが, いずれの形をとるにせよ, その形の質は「苦しみ (suffering)」とか「犠牲 (sacrifice)」であるとティリッヒは考えている。もちろんティリッヒが「苦しみ」とか「犠牲」とかいう時, 彼が頭の中に思い描いているのは, 最終的にはイエスの苦しみとかイエスの犠牲のことであるが, 「深さ」にも多面的な「深さ」があるといえるように, 「苦しみ」とか「犠牲」も必ずしもイエスだけのそれに限定しなくてもよい側面があるといえる。とにかく, 「苦しみの深さ (the depth of suffering) が真理の深さへの (to the depth of truth) 扉, 唯一の扉である。」(Ap.59, A'p.86) (真理については後述する。)

そして, 苦しみの深さによって見い出されるものは, 逆に「喜び (joy)」である, とティリッヒはいう。「深さへの道の尽きるところは, 喜びである。そして, 喜びは苦しみよりも深い。それは究極的 (ultimate) である。永遠の喜びは, 表層に生きることによっては到達されない。むしろ, 表層を突き破る (break through) こと, 自分自身と世界と神の, 深い事柄に透徹していく (penetrate) ことによって到達されるのである。私達の生活の最後の深さに達しえた瞬間は, 私達が喜びを経験できる瞬間である。なぜなら, 深さには喜びがあるからである。」(Ap.63, A'p.91~p.92) とまことに逆説的なことをいう。このことを, 『新しい存在』においては, 「喜びとは, 自分の真実の存在において, つまり, 自分の人格の中心において, 自分の存在が満たされていることを意識すること (the awareness of our being fulfilled in our true being, in our personal center) 以外のなにもものでもない。」(Bp.146, Bp.137)<sup>(3)</sup> とか, 「喜びは, 苦痛 (pain) の反対のようである。しかし, 苦痛と喜びは共存しうることを, 私達は知っている。喜びで

はなくて快楽 (pleasure) が苦痛の反対である。」(Bp.144, B'p.135) と。(ティリッヒは, joy と pleasure とをちがった概念として使っていることは明白であるが, suffering と pain との異同が, 私にはもう一つよくわからない。)

以上, ティリッヒの「深さ」の概念について述べてきたのであるが, 彼のいう「深さ」の概念は, 同時に「真理 (truth)」の概念でもあることを, 以下, 述べてみたい。

「真理 (truth) というギリシャ語のことばは, 隠れているものを顕わすこと (making manifest the hidden) を意味する。真理は隠れている, そして発見されなければならない。だれもそれを自然的に (naturally) 所有していない。真理は表層下の深い所 (the depth) にある。私達の存在の表層は変化し, 大洋の波のように絶えず動いている。従って, 表層は人を惑わせるものである。深さは永遠であり, 従って確実である。」(Ap.116, A'p.157) 「真理は, キリスト教においてもギリシャ的思想においても, ひとしく隠れたものである。」(Ap.116, A'p.158) ギリシャ的思想にしてもキリスト教にしてもいずれにしても, 「深さ」の概念と「真理」の概念とを結びつけたのは, ティリッヒのすばらしい独創であるといえる。ティリッヒはいみじくもまとめている。「宗教の逆説的なことばは, 真理への道を深さへの道として, 従って, 苦しみと犠牲の道として, 明らかにしてくれている。」(Ap.62, A'p.90)

さて, 「深さ」にいたることを回避しようとする口実をティリッヒは二つあげていると前に述べたが, 「真理」においても, それを問うことを回避する二つの誘惑があるとしている。「その一つは, 自分達こそが真理をもっていると主張する人々のそれであり, もう一つは, 真理など心にもとめない人々のそれである。」(Bp.68, B'p.114) 前者について, ティリッヒは, 自分が所属する教会とか国家とかある政党とか親代々の伝統などに浸りきって, そこにのみ真理があると信じこんでいる人々をあげている。後者については, 大衆をあげている。つまり, 彼等は, 人生は真理と半分の真理と虚偽との混合でしかない, という。ごちゃまぜにして生きていくこと, 究極的に重要な意味をもつ真理を問うことなしに人生の大部分の困難をうまく切り抜けていくことは, 可能であると思っている。(Bp.68~p.69, B'p.115) (前回のパウル・ティリッヒ研究(IV)との関わりでいえば, 前者は偶



像信仰 (idolatrous faith), 信念 (belief), ドグマティズムと表裏一体の関係にあり、後者は無関心 (unconcern, indifference) と表裏一体の関係にあるといえる。) ティリッヒがいずれの誘惑をも肯定しないのは明白であるが、特にティリッヒが警戒するのは前者であるように思う。(どの著作を読んでもそのことを感じる。) すなわち、自分達のみが真理を所有していると主張する人々である。このことが起きると即、偶像信仰やドグマティズムが生じてくる。教会の歴史、キリスト教の歴史は、偶像信仰やドグマティズムとそれらを超えようとする緊張・葛藤の歴史であったし、現在もそうであるといえる。このことに関して、ティリッヒは名言を吐いている。「もしあなたがイエスとともに歩くことができないならば、ピラトとともに歩きなさい。ただし、ピラトとともに真剣に (in serious) 歩きなさい。」(Bp.68, B'p.114) イエスとともに歩きなさいとすすめることは、神学者、牧師、キリスト教教師、信徒ならば、容易にできる。そして、イエスとともに歩くことに真理があるということは容易にいえるが、そして、そのことは真実であるが、しかし、それが教会という集団とともに歩きなさい、そうすれば真理をもつことができるという、偶像信仰、ドグマティズムに変容されるのであれば、むしろピラトとともに歩くほうが「深さ」・「真理」に到達できるといえる。ティリッヒはいつているように思える。ただし、ピラトと歩く場合でもピラトとともに真剣に歩きなさいということにティリッヒは忘れてはいない。

これまでかなり宗教の真理 (イエスの真理) について入りこんでいるのであるが、「深さ」の所でも述べたように、ティリッヒは、世俗的用語としての深さと宗教的用語としての深さを峻別しないで使用しつつ、最終的には宗教的用語としての深さを語っているというように、どこで世俗的用語としての深さが宗教的用語としての深さに転換されるのか明白でない不透明さを感じたが、真理においても、ギリシャ的思想 (ヘレニズム) における真理とキリスト教的思想 (ヘブライズム) における真理を峻別しないで語りつつ、最終的にはキリスト教的思想における真理を語っているのである。ティリッヒ自身にとっては至極自然なことであるかもしれないが、そしてそこにむしろティリッヒの神学や思想の特色があるといえるのかもかもしれないが、私としてはもう一つわからない所でもある。以上のようなことを感じるが、けれどもとにかく、ティリッヒは深さと真理を結びつけ、

深さとは真理であるとしたことは、前にも述べたし、このことは確認しておきたい。

しかし、ティリッヒは、ギリシャ的思想における真理とキリスト教的思想における真理をやはり区別している。「ギリシャ的思想においては、真理は、ただ見い出されうるのみである (can be found)。ギリシャ的思想においては、真理は、事物の永遠不動の本質の顕現 (the manifestation of the eternal, immovable essence of things) である。」(Ap.116~p.117, A'p.158) これに対して、「キリスト教における真理は、何か起きるもの (something which happens), 特定の場所, 特定の時, 特定の人格 (a special personality) と結びついたなものかであることを示している。(略)キリスト教における真理の神秘は、生命 (life) であり、人格的生命 (personal life) であり、啓示であり、決断である。」(Ap.116, A'p.157~p.158) と。そのちがいが、ギリシャ的思想における真理では到底出てこない、「私は真理である (I am the truth.)」, 「真理は……となり (The truth has become …)」, 「真理に属するもの (who are of the truth)」のような表現を可能ならしめているのもある。

福音書で「真理」の問題を取り扱っているのは、ヨハネによる福音書とヨハネの書簡類であるといえよう。ティリッヒは、ギリシャ的思想における真理にいたる道 (方法) については述べていないが、キリスト教における真理すなわちイエスという真理にいたる道について、次のごとくいつている。「真理を行なうことによって (by doing the truth) である。このことは、律法に服従し、それを受け入れそれを実現することではなくて、真理であるイエスのリアリティ (reality) から生きること、すなわち、イエスの存在を私達自身及び私達の世界の存在にすること、なのである。(略)イエスにとどまる (remain) ことによって、である。」(Bp.71, B'p.118)と。

ギリシャ的思想における真理とキリスト教的思想における真理の異同の問題を取り扱い出すと、非常に大きな問題になりすぎるが、キリスト教教育にとっては、その問題は明確にしておかなければならないものであるといえよう。そのことは、典型的な例としていえば、ソクラテス・プラトンの思想とイエスの思想の問題でもあろう。キリスト教教育をうたいつつ、中身はギリシャ的思想における真理が重要視されることになりかねないからである。ギリシャ的思想における真理とキリスト教的思想における真理

の異同の問題については、IIIで述べることにしたい。

### III 「深さ (depth)」の概念が教育に示唆する諸点

これまで述べてきたティリッヒの「深さ」の概念は、私にとって非常に興味深い概念であった。

それは、まず第一に、ティリッヒの先をも見通した現実認識の鋭さと正確さによる。思想においても生活においてもどんなことにおいても、表層から表層への平面の動きが圧倒的な勢いでなされている今日、そして現代はその極みに達しているといえる今日、それ故、思想においても生活においても信仰においてもどんなことにおいても、垂直の動きである深さを問題にしなければならないのではないかというティリッヒの指摘は、そのことだけでも、現代に対する重要な問題提起をしてくれているといえると思う。現代の私達の思想や生活や信仰や学問などいかなることにおいても、最も欠けているのは垂直の動きである深さであろうと思う。そのことを指摘してくれただけでも、思想家としてのティリッヒとして、高く評価されてよいと思う。

第二に、垂直の動きの重要性をいっても、上昇のベクトルにおける垂直の動きではなくて、下降のベクトルにおける垂直の動きすなわち「深さ」の重要性をいっているのは、いかにもティリッヒらしくて、見落としにならない点であると思う。それはどういうことかといえば、思想の問題にしても価値の問題にしても教育の問題にしても宗教の問題にしても、高く上昇することはいいことなりと考えられがちであり、ともすればバベルの塔を築くことに努力を傾けてしまい、深く下降するというようなことは、私達の発想の中に入ってきにくいのではないと思われる。にもかかわらず、上昇のベクトルではなくて、あえて、下降のベクトルを考えたことは、ティリッヒのユニークさであるといえよう。もちろん、ティリッヒが下向きの「深さ」なる概念を考え出した背景には、ティリッヒが自覚しているにせよしていないにせよ、実存哲学に対する深い知識、深層心理学に対する深い知識などを、ティリッヒがもっていたということがあげられると思う。現代人である私達は、このあたりで、表層から表層への平面的な動きではなくて、垂直的な動きを、垂直的な動きの中でも上昇へ上昇へと動くのではなくて下降へ下降へと動くことを、思想の問題にしても生

活の問題にしても、教育の問題にしても、信仰の問題にしても、私達のものとしなければならないのではないか。このようなことをティリッヒから強く感じさせられる。

第三に、上述の二つとも関連しているが、少しちがった側面でいえば、人間関係（親子関係、友人関係、教師と児童・生徒との関係）でいえば、特に学校教育における教師と児童・生徒・学生との関わりでいえば、児童・生徒・学生の発言や叫びや願いがその児童・生徒・学生のどういう深さから発せられているものであるか、そして、教師はそれを聴きとること・受けとめることができているのか、逆に教師が発することばや児童・生徒・学生に対する願いが、その教師のどういう深さから発せられているものであるか、そしてさらに、子ども達と教師の織り成す関係が、どういう深さのレベルで切り結ばれているのか・接点をなしているのかが、今日の学校教育（初等教育にせよ、中等・高等教育にせよ）は、実は問われているのではあるまいかということもティリッヒから考えさせられる。こういうことへの関心、こういうことから教育を発想することが、現在の教師にはあまりに少ないのではないかと思われてならない。

第四に、学校教育において、「深さ」にいたることが可能になる要因を、ティリッヒの「深さ」の概念を参考にして、考えてみたい。（このことは、「喜び」を経験する教育を可能にする要因を考えることでもある。なぜならば、ティリッヒにおいては、「深さ」への道の尽きるところは、「喜び」であるのだから。）(1)中国の皇帝が有名な画家に鶏の絵を描いてくれるようにたのんだ時、その画家はそのためにはながい時間がかかるといった例を前にあげたが、「深さ」は元来空間的概念であるが、空間にしても精神的質にしても、深く入りこむためには、それに比例相当する時間が、まず十分に保障されなければならないといえる。「深さ」という空間的概念が、「時間」と深く結びついているというのは、まことにおもしろいことである。子どもにしても、教師にしても、その両者が織り成す教育活動にしても、いそいでいてはあせっては、到底「深さ」に到達することはできないとの認識がまずなければならないと思う。(2)鶏を十年間研究した結果描いたその画家の作品は、鶏という宇宙の小さな一部分であっても、それは宇宙の神的根底 (the divine ground) を余す所なくあらわしていたということも例で述べたが、ここから学校教育においていかにさせることは、教材の精

選ということであろうと思う。どんなに教材をふやしても、表層にとどまるか浅ければ、「深さ」には達しない。(そして、教材をふやすということは、どうしても表層にとどまることになり、教材をふやしても「深さ」に達することはなかなかできにくいことである。)逆に、教材を精選すれば、可能性としては「深さ」に達することができやすいといえる。どんなに小さくて狭いことであっても、そのきわみの深さは真理の鉱脈につきあたるといえる。さらに、精選された教材の一つ一つは、もちろん質が深い教材になっていなければならないことはいうまでもない。(3)どんなに時間が保障されていても、教材が精選されていても、それだけでは、子どもにとって、また、教育活動にとって、「深さ」にいたるものとはなりえない。子どもの表層を揺り動かしてくれる (shake and disrupt) きっかけとなることができる、起爆剤としての、引き金としての存在がいなければならない。それが教師であろうと思う。教師とは、その役目の一つとして、このようなことを担っているのではなからうか。子どもにとって、その表層を強く揺さぶりをかけてくれる存在、それが教師であろう。(4)中国において、画家が十年間も鶏の絵を描くために鶏なるものに集中したように、子ども自身が教材そのものあるいは教師を媒介にして教材に、集中 (concentration) できることが生起しなければならないと思う。教師も自らがおこなう教育を深いものにするためには、準備の段階での教材に集中し、授業においては子どもに集中することが生起しなければならないと思う。(5)画家が鶏の画を完成するのに十年もかかったのを皇帝がじっと忍耐して待ったように、特に教師にとって、子どもとの関わりにおいては忍耐できるということができなければ、子どもは「深さ」にいたることができない。子ども自身も、忍耐が必要なことはいうまでもない。(6)画家が鶏の絵を描くための準備の日々が黙想 (contemplation) の日々であったように、特に宗教教育においては、瞑想 (meditation)、祈り (prayer)、告白 (confession)、自己吟味 (self-scrutiny) などが、「深さ」にいたる一助となるであろう。しかし、いずれの形であってもその質は、苦しみ (suffering) であり、そして苦しみと背中合わせに実感されるのは、喜び (joy) である。

第五に、私の今後の課題の一つとしてあげておきたいが、それは前にも述べた、ギリシャ的思想における真理とキリスト教的思想における真理の異同の問題である。ティリッヒ自身は、真理の問題はギリシャに最初に生

じた問題であり、他方聖書においては、真理の問題はヨハネによる福音書やヨハネの書簡類にあらわれており、そしてそれらは小アジア（エペソ）で書かれたので、聖書において真理の問題を扱う際ギリシャ語を用いてそしてギリシャ的思想を借用しつつ、結果的には真理の概念を変容している（transform），といている。この問題は、実は、典型的例としては、ソクラテスの生死の意味とイエスの生死の意味の異同の問題でもあろう。このことは、哲学、思想における問題であるとともに教育における問題でもある。実は、この問題を考えるきっかけを授業という形でもなしてくれた人がいるのである。<sup>(4)</sup>それは、林竹二氏である。彼は、1977年5月21日に、そして、同年8月10日に、どちらも湊川高校の生徒に対して、「創世記」そして「もの識りであるということと賢いということ—ソクラテスについて—」と題して、授業をおこなっている。（同じクラスが両方の授業を受けている。）林氏が、授業において、ヘレニズムとヘブライズムの異同の問題をわからせたいとの意図があったかどうかかわからないし、そして、前者即ち「創世記」は旧約聖書に関わることで新約聖書のイエスのことは全然授業の中には出てこないが、にもかかわらず、林氏の授業は、ソクラテスの研究者である林氏の中で、ヘレニズムとヘブライズムがどう関わっているのかに対して、私の興味があるばかりではなく、授業において一人の生徒の中で、それらが混同されないでどう位置付けられるかをあらわにするきっかけをなしてくれる例として、興味があるものといえる。しかし、このギリシャ的思想における真理とキリスト教的思想における真理の異同の問題は、現在の私には大きすぎる問題であるので、前にも述べたように、今後の課題としたい。

「深さ」の概念を手がかりとして、教育学ないしはキリスト教教育学へのティリッヒの貢献と示唆を、私は、以上のように考えた。

以上は、昭和56年の第24回教育哲学会全国大会で、パウル・ティリッヒ研究(V)——説教集を手がかりとして——と題して口頭発表した原稿に、加筆したものである。

(注)

- (1) 石井次郎「教育哲学の任務と課題—人間学の立場から—」『教育哲学研究』第29号 教育哲学会1974年p.1. 三上茂「教育の本質と人間観」『人間形成の研究』福村出版 1975年p.63。
- (2) Paul Tillich, *The Shaking of the Foundations*, p.79. 『地の基ふるい動く』新教出版社1974年p.113。この論文において以後この著作を引用する場合はA（邦訳の場合はA'）であらわすことにする。
- (3) Paul Tillich, *The New Being*, p.146. ティリッヒ著作集別巻一白水社p.137。この論文において以後この著作を引用する場合は、B（邦訳の場合はB'）であらわすことにする。
- (4) 林竹二著『教育の再生をもとめて—湊川でおこったこと—』筑摩書房1977年p.122~p.182。

(1981年12月22日)